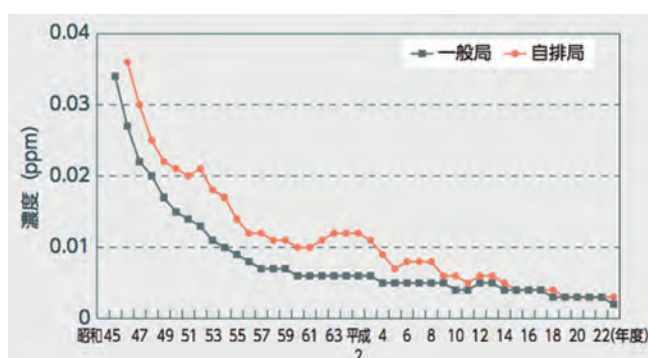


## 資料：大気汚染の状況

大気汚染が生物に及ぼす影響や被害については、ヒトへの健康被害だけでなく、他の生物の生息あるいは生育環境の悪化や分布域の減少など、様々な問題が指摘されている。大気汚染を起こす物質の種類は多いため、それらの原因物質ごとに観測や対策が進められている。ただし、光化学オキシダントのように複雑な機構で発生する原因物質もあるため、対策はそれほど簡単ではない。

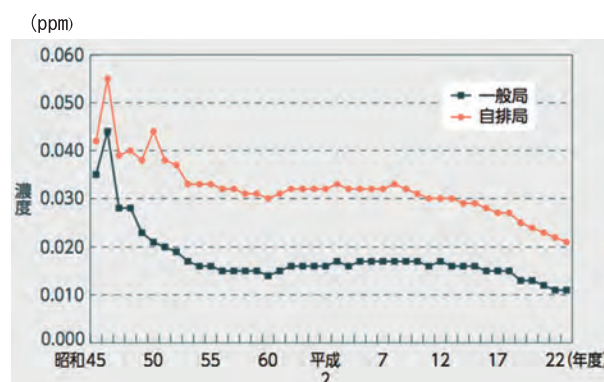
我が国の大気環境において、かつて公害の問題の中心的課題であった二酸化硫黄（図1）（環境基準値は1日平均値0.04ppm）や一酸化炭素などによる汚染については大幅に改善された。

二酸化窒素（図2）（環境基準値は1日平均値0.04～0.06ppm）や浮遊粒子状物質（SPM）（環境基準値は1日平均値0.1mg/m<sup>3</sup>ppm）などについても全国平均で環境基準を達成しているが、都市部を中心に、自動車交通量の増加や交通渋滞などにより、依然として深刻な状況にある。



出典：環境省・大気環境局「平成23年度大気汚染状況について」

図1 二酸化硫黄濃度の年平均値の推移



出典：環境省・大気環境局「平成23年度大気汚染状況について」

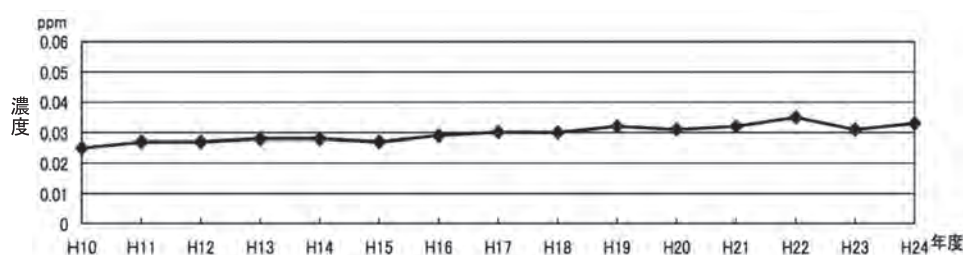
図2 二酸化窒素濃度の年平均値の推移

\* 「一般局」「自排局」については、本ページ下を参照。

さらに、光化学オキシダント濃度における環境基準の達成状況は、依然として極めて低い水準となっている。本県では昭和60年以降の測定値が記録されているが、全国的な傾向と同様に、横ばいの状況が続いている（図3）。

酸性雨については、日本での被害は目立っていないが、二酸化窒素や二酸化硫黄が原因物質として指摘されており、その状況や影響については注意深く観測が続けられている。

近年、二酸化炭素など温室効果ガスの濃度の増加などによる地球温暖化を始めとする地球環境問題が深刻化しつつあるという認識が高まっている。一方、アジア地域など急速な工業化を遂げつつある諸国の経済活動の規模の拡大に伴って、窒素酸化物（NO<sub>x</sub>）や二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）等の大気汚染物質の排出量が増大することが予想される。



出典：栃木県「環境の状況と保全に関して講じた施策」

図3 栃木県の光化学オキシダント濃度の推移（昼間の1時間値の年平均値）

※ 図1および図2の「一般局」と「自排局」について

- ・一般局：一般環境大気測定局。住宅地などの一般的な生活空間における大気汚染の状況を把握するため設置された測定局。
- ・自排局：自動車排気ガス測定局。交差点、道路、道路端付近など、交通渋滞による自動車排出ガスによる大気汚染の影響を受けやすい区域の大気状況を常時監視することを目的に設置される測定局。